

# COSMOS集



すると電柱ほどの木にのぼり剪定はじむ冬の境内  
冬の寺たたみのうえで語りたる京のガイドの厚地のソックス  
深すぎる京のふところ巡つても巡つてもまた寺院現わる  
白黒の版画のように家具うかぶ真夜にめざめた旅先の部屋

## 三歳の鬱

古木 増美 岐 卓

それは内緒だ

泉

「あすなる集」特選  
陽太郎\* 東京

死ぬまではなるべく生きていたいのと縄跳びを飛ぶ白髪のひとつ  
縄跳びを飛ぶたびに年老いてゆく少女にはまだそれは内緒だ  
雨降りど雨降りでない境目をちよんどの私の電車は過ぎた  
99と100の違いは1と2の違いと同じ泥濘をゆく  
青春は突き進めソフトクリームのコーンを先に食べてしまった

寒 夜

北

祐二郎 佐賀

街灯にひかる喜劇のポスターの中に小さな街灯ともる  
しろがねのドアノブ鈍くひかりゐて恐る恐るに触れゆく寒夜  
真冬真夜しづかな言葉並べても熱くなりゆく歌詠む胸は  
あかとき氷の肌光らせて凍滝青き空へとつづく  
三光門くぐりて匂ふ梅の花道真の歌碑にうぐひすの鳴く

京のふところ

手 嶋

千 尋\* 福岡

川に浮く鳥たちのよう散らばって開演を待つ四角い広場

「人間はいいものかしら？」母狐の声でをさなに囁き眠れ  
沈丁花にほふをたよりに探索だ産院の母の在り所問ふ子と  
春立つ日「お姉ちゃんね」と言はれても親指握る三歳の鬱  
おふとんの海で泳ぐ子 フイクションで母の不在を磊落に捨つ  
晴れて今日八ツ手の花のやうな手で退院の母の膝にすぎる子

## レコード

笠 井 栄 子\* 香川

お年玉袋に入れんと一葉の顔たしかめる年頭の顔  
給湯器が「お風呂の栓はしましたか」「はいしました」と会話をまわす  
ラッピングしたままのLPレコードを処分して古き音楽捨てる  
処分する事に決めたりレコードのジャケットに「湯島の白梅」あるも  
ステレオとレコード盤を処分して「身軽になった」と洋間の床が

## 春の足音

義 原 富喜子 鹿見島

合格を知らせる生徒のはづむ声近づく春の足音と聞く  
頂きしダウンジャケットはピンク色着心地よきも色に馴染めず  
特別におやつチョコを手渡せばにつこり顔する男子生徒ら  
デイケアでバレンタインのチョコ貰ひ「お供へせむ」と嬉しげな母  
野菜切るわが包丁の音を聞き切れ味悪さうと言ひつつ来る夫

焼 べ る 大 越 巖 福 島

ケータイがどこかに失せし四日間 替りも慣れたガラケーにする  
ラーメンのドラマ見しのち味気なき衆議院予算委員会中継  
人であれば治療受くるに養豚は豚コレラとて殺処分さる  
火を焚きし時代は遠くなりけり焼べるといふ語聞かず使はず  
蛸のあたまは本当は胴しめやかに読経流るる最中におもふ

冷 気 下 城 公 秀 熊 本

陽の落ちし金峰山麓ひつじ雲燃えて降誕祭の夜となる  
スタンドの物干し我が家のツリーなり降誕祭の夜のリビング  
写仏する朝の机上に如月の冷気を溜めて文鎮二つ  
袈裟がけにラケット負ひし少年ら寒風切りて自転車を漕ぐ  
港湾の見ゆる墓所に水仙の群がり咲きぬ父七回忌

麦畑を行く 園 田 由美子\*熊 本

北向きの小さき庭のクリスマスマスローズ静かに節分迎う  
薄雲の間に漏るる冬の陽を顔に受けつつ麦畑を行く  
補修ありシール貼らるる図書館の本を借りたる土曜日の方  
目に留まるインフルエンザ注意報日本国中赤色に塗る  
初めての帯状疱疹に見舞われて梅の盛りの過ぎゆきにけり

専 政 機 構 義 原 一 郎 鹿見島

春立てど降りみ降らずみ沖繩に「県民投票」告示されたり  
失言の狐や狸のみにくさよ尻尾を巻いて消えてくれぬか  
気が付けば「忬度」が過ぎ腐りたり政治主導とふ専政機構

佐び、さびをぐつと噛むよな思ひあり晩酌せんと義歯入るととき  
意志あるは器か水かすみやかに我が身の内を水が流るる

ニューカレドニア 笠 井 秀 子\*徳 島

終活の体験コーナー入棺し自ら「よいしょ」と出る人のいて  
終活の一つのように天国を一度観ようとニューカレドニアへ  
鱈つけてシユノーケリングす海中で魚になれず人魚になれず  
何事も深くは考えないという友は浅瀬を好む深海魚  
フェルメールの絵の中の女は牛乳をひたすら注ぐ溢しはせぬか

亡 父 の 声 菊 山 正 史\*広 島

職退いてなお研修に間に合わぬ朝床の夢われを追い詰める  
古稀過ぎて公認心理師を取得した友の電話は遠く聞こえる  
柿洪を投網に塗れば亡父の声「わたつみの民の末裔ぞ」と  
母の背に両手を回し着替えさす腕に伝わる母の温もり  
ヒューヒューとひよどりが鳴く暮れ方はホームの母の息を思えり

体 の 不 思 議 故 田 中 伸 子 大 阪

病院の朝のメロンはおいしいなああ生きてゐてよかつたと思ふ  
七草も鏡開きもなかりけり一月四日われ入院し  
色のない病院生活より戻り自分の色をとれどもどしゆく  
三毛猫のミネラルいっぱい満ちてゐるわが家はいいな温かくつて  
薔薇たちに水を遣るとき息切れのしないわたしの体の不思議

う す ら ひ 萩 原 栄 子 埼 玉

「これ以上ほけられませんが」紅玉の林檎が籠につぶやく夜更け

「オーライ」の声の鋭く連呼して塵取集車朝を拓けり  
買ひて来し漬物食めば塩の沁む重く冷たき石を踏たしめ

リンパ腫に逝きし向かひの医師の家のキウイの棚は西風に飛ぶ  
ゆるやかに川面を閉ざすうすらひの間に息吹く水のゆたけし

太 刀 魚 末 吉 瑠璃子 山口

真つ黄色のミモザの花を買ひたれば頭の隅の覚醒さるる  
ミモザ売る媪の指は節くれ立ち働きものの手よと思へり  
明け方の市場は寒しト口箱の太刀魚銀の輝き放つ

真つ直ぐで長き太刀魚ト口箱をしつぽの先がはみ出してゐる  
コタツに入りイチゴアイスを食べながら今年の開花具谷ひを思ふ

か る た 会 片 山 清 子 和歌山

おだやかな気候を天に地に願ひ除夜の鐘つくこは菩提寺  
疎遠なりし友が賀状に新聞の短歌みてると書き添へてあり  
かるた会十年ぶりの復活に歌会の友と喜び勇む

小中の生徒ら二十四名が賑はひ集ふ村のかるた会  
「初春の公民館に……」空札を読むわが声に会は始まる

あなたはどなた 杉 本 な お 静岡

猫舌も治してくださいと焼きをふたりに食べるいつかのために  
また同じ港へ帰る遊覧船あなたはウミネコばかり見てゐる  
ウミネコの期待にお応へできぬまま波間へ消ゆるかつばえびせん  
果物をもぎ取るやうにのべた手のとてもきれいなきんにくでした  
一枚の海を隔てて夜の島はヘッドライトの届かぬところ  
もうこゝは地球ぢやないかもしれないよ囁いてゐるあなたはどなた

未 知 島 山 タイ子 岩手

マーカ一の数値によれる判断かMRIの検査告げらる  
父よりも兄姉よりも永らへて喜寿なる夫に病名くだる

飲み葉、ホルモン注射始まりぬ 夫の身体の未知を引き受く  
おだやかな看護師の声「おだいじに」クラシックの曲流るる医院

「よぐ来たなあ」生前の声恋しくて空家をたづね父母に逢ふ

お ぐ ろ く 水 野 正 城 茨 城

今日一日森で勞せるボランテアねざらひあひて帰る笹道

こはばれるわが身の老いを払はんと木刀を振る寒風の中  
ホバリングしつつパンくづキャッチするユリカモメの羽根青空を掃く

杉はやく樅ゆつくり燃える火をたしかめながら過ぐす一日  
おぐろくの篠の切り株踏み抜きて二年ともたぬ我が作業靴

話 の 圏 外 時 田 泰 子 静岡

朝ドラの「まんぷく」の曲始まりてふだんに戻る正月四日

ベレー帽被つたやうな丸型のポストに投函「今年もよろしく」  
今年限りの賀状とありぬていねいに書かれし卒寿の友の筆跡

家中に金柑の香をこもらせてつやめく甘露煮ゆるりと仕上ぐ  
集ひたる孫三人は受験生我は彼らの話の圏外

ユ ー カ ラ 古 山 勝 夫 茨 城

吾が生るる前に逝きにし曾祖父母、祖父母のことを母は語り  
ユルカラ叙詩にならひ伝へむ父祖のことひとかけらづつ短歌に詠みて  
わが家の刀自は論客畏るべし曾祖母、お袋、ああ吾が妻も

正月も粥の貧しき父祖あれば三箇日には餅を食はざる  
命令のままに動ける軍隊に思考力置き父もどりきぬ

うつつすらと白

松 永 知 子\* 東京

街路樹にうつつすらと白おくのみに消えゆけり待ちわびし初雪  
自動ドア開きひそけくおみな子の髪にきらめくみぞれの粒子  
喉越しよき麵すすりつつ唐突に怒りのごときが込み上げてきぬ  
ピルの間のゼブラゾーンは風の道コートの衿を立てて歩めり  
春蘭の鉢を抱えて乗り込めるおみなと運ばる今朝の地下鉄

絢爛豪華

平 沢 恵美子\* 新潟

銃をもつ觀光警察に守られてエジプト五千年の遺跡をまわる  
あちこちに銃を持ち立つ警官のわれらに向ける目差優し  
盗掘者のつくりしトンネル身をかがめ盗掘者のごとピラミッドに入る  
七カ国の人の生命を守りたるナイルは青く神のごと流る  
チャータールの滞在したるホテルの部屋絢爛豪華な灰皿置かる

冬の溜息

篠 山 重 威 京都

新年はそぞろに寂しお節なく屠蘇なく年賀の客もなければ  
酔心の冷酒と桂馬のかまぼこでふる里偲ぶ二人正月  
昭和過ぎ平成の代も行かむとす我はひたすら老いを生き継ぐ  
路地に沿ひ咲く水仙をつみ取りて冬の溜息持ち帰りたり  
水仙の群咲咲くうへの山茶花の濃きくれなるに初日差したり

福を呼び込む

橋 本 正 美 神奈川

白波を運ぶ風受けはざ掛けの大根続く三浦海岸

予報士が恵みの雨と言ひし朝落葉を分けて落のたう出づ  
乗り降りに時間のかかる路線バス車内九割高齢者なり  
豆撒きの声の聞こえぬこの辺り福を呼び込む我はソプラノ  
白梅の林をぬけて行く里にはたるを育くむ湧き水の音

朱のおちよば口

中 西 きく子 東京

袖頭巾の乙女の土鈴振りてみぬ吹雪く酒田の映れる夕べ  
色褪せし素焼きの土鈴 袖頭巾の目を伏す乙女の朱のおちよば口  
裾長く曳く赤富士の描かれたる土鈴はまるで銅鑼焼きサイズ  
三猿の土鈴買ひたり口覆ふ猿振りたれば葉擦れの音す  
軒下のほつほつ白き窓ぬくし合掌造りの鳶色土鈴

猫が見てゐる

草 薙 淑 子 三重

手焙りに両掌かざして暖をとる舅が頭ち来る今日一月尽  
背を伸ばし前見てさつさと歩むゆる視野が開けてあしたが見える  
電線に掠が並びて北を向く春一番が吹いたらしいよ  
恋愛を知らない私の青春は薄くて不味いせんべいでした  
福は内と豆を撒きまき鬼を遣る独り芝居を猫が見てゐる

波 花

斎 藤 嶺 也 北海道

わだつみの荒れたる暮れの留萌路は吹雪のごとく浪花の立つ  
元旦の雪のしじまにこゑきよく初の客なるシジュウカラ二羽  
初詣で年ごとに増す願ひごとく気弱き年齢になりにけるかも  
一年を守り賜ひし神札はどんどの煙に乗りて還りぬ  
初春の歌会はたのし中庭の雪見の滝はうたを詠ましむ  
しるたへの雪の布団にくるまりて北の大地は冬眠しをり

「日日是好日」

大倉和江 広島

書初めの「日日是好日」を壁にはる 吾の残生明るくせんと  
節分の豆は齢の九十一ヶ ポツリポツリと刻かけて食む  
寄り添ひて助け合ふごと千両の朱実は生き生き部屋も明るむ  
掛け軸の外に出さうな鶏の足「若冲」の絵は吾をひき込む  
堀文字の訃報に驚く氏の描きし「ブルーポピー」が眼にうかぶ

青空に言ふ

池上昌子 東京

骨折のからだ潤す雨の音立春まぢかな夜にひびけり  
三月ほどはめしコルセツトはづすけふ小さく光る裸木の芽が  
コルセツトはづして歩く軽やかさ人には言はず青空に言ふ  
天界にちかき玻璃窓ふくひとは冬の運河の風をみおろす  
水底にまなこひらける魚のゐてしづかに満ちる暗き運河は  
魚族がこゑなく棲めりひつたりと開かぬ水門運河にありて

ダメダキヨウハ

星野尚子\*新湯

「その二集」特選

「オニは外！オニは外！」って言わないでママがおうちに居られないから  
この国の記号を文字と認識する回路つながり『…ぐり…と…ぐら…』読む  
宿題をしない我が子を怒鳴らずに低音ボイスで静かに攻める  
行き詰まり「ためだ今日は！」と打ち込めば「ダメ妥協は！」と返すPC  
粉雪を眺めほおぼる日向夏強い酸味の春がはじけた

道徳心

新屋希子 熊本

足もとに菓子袋が吹かれ来てわが道徳心を値踏みするなり

労災をゼロにするぞと復唱し虎柄テープで増やす結果

入社式につるりとした顔並びをり良き敏作る日々よ生まれ

逝きしひとはいちこの苗を手渡しぬ忌明けの前のある朝の夢

超音波当てれば筋腫がこちら向くかつては吾子が跳ねてゐたのに

サーチライト

前田 亜津子\* 神奈川

タンポポをんぼんぼんぼんと言ひし子が二十となりてわれに理を説く  
ぬばたまの夜道を照らす一条のサーチライトだ子のえがく夢  
若き日の父のかんばせ得意げな新築祝いの宴の写真  
「忘却」の病を生きたらちねの母の言葉づかいはいうつくし  
サイダーの泡のはじける音のして渚の波は砂に沁みゆく

ただのちちはは

小谷 優香\* 鳥取

父が逝き小さく小さくなりし母紙風船がクシャツしたみたい  
冷蔵庫に考の好みし文旦が今も鎮座す同じ所に  
大切に愛してくれし父母は肩書きのなきただのちちはは  
ノンレムにすんと落ちる瞬間の身体は軽く時空を今超ゆ  
白うさぎ乗せて浜へと列をなす鮫なり「白兎海岸」のサーファー

母に寄り添ふ

印出 美由紀 神奈川

ふきのたうの醤油漬け載せ白飯が旨しもうすぐ母が死ぬのに  
止め処なく酸素送られ止め処なく喘ぎ続ける母に寄り添ふ  
肝病める今際の母は黄色くてことに眉毛の毛根あたり  
認知症進みし母の死にぎはの眼はすべて諒とすること  
午前四時骸の母は帰宅せり右膝ぐくの字に曲がりたるまま  
斎場に母のからだを送り出し母の布団の窪みに触れぬ

家 飲 み 村 田 淳 子\*埼玉

いきつけの店がつぎつぎ閉店し夫は家飲みによくやくめざむ  
今晚は飲もうと夫が市場にてまなこひらきて好物さがす

おすめはまずは食べ頃香の物、袖味噌のせたふるふき大根

吟醸酒二合を飲みて夫はもう明日が早いと今宵おひらき

男の孫は吾のちぶさをチョイとさわりこれがあいさつ三歳五歳

智 頭 弁 梶 薫 子 鳥 取

新客にかしこまりつつ話す母すぐに打ちとけ智頭弁となる

帰省せる十六人のまかなひに追はれ仕舞湯日付けがかはる

しぐれ降る夜の国道トラックは唸りをあげて峠越えゆく

雪解けの水高増せる井手川は春の日受けて白銀に光る

居眠りもいつしか寝息をたてはじむそつと膝掛け母の背に置く

青 き 翼 を 高 山 幸 子\*三重

この冬に鶴の姿未だ見ず聴耳頭中でうわさ聴きたし

清水に着物きこなす参拝者さえずるように異国語かわす

真鱒の群れ泳ぐごとくきらめきてオリブの葉は風にそよげり

いかなごを煮詰める醤油の香りたち小豆島の路地はるの風吹く

春の空翔けてみたかろ日本橋の麒麟はひろく青き翼を

う ま し よ 鰻 鮓 中 居 久 子\*岩 手

畑隅の辛夷の大樹新芽抱き大寒の朝にかがやきて佇つ

ひゅうひゅうと粉雪舞い散る昼餉時うましよ鰻鮓眼鏡がくもる

たくましい心が欲しいたつたひとり波の音聴き生きねばならぬ  
これしきのことにくよくよするなかれ夜が明ければ日は昇り来る  
二番目に好きだったよとささやかれほのかに温し古稀の会わく

森の音きく 加藤 泰 子 愛 知

伸びに伸び枝を抜ぐる臘梅の淡黄色の花青空が似合ふ

らふ梅は臘月の花 露を含み俯きい並びけさの雨止む

大入日遠山並みに朱光満つ煌々煌輝 唯にをろがむ

高く低く響す鐘の六つを聴き冬の夕昏れ森の音きく

湯呑を手に新聞を読むこのポーズ止きひとの朝の、吾もしてゐる

徳 之 島 松 本 美 江 子 鹿 見 島

天気図は西高東低、真冬日とあれど温としわが徳之島

仰向けに寝てゐて両手、両足をブラブラ揺するゴキブリ体操

身の回り不用品整理したりしに気づけば元の場所に又ある

東北は雪の吹雪くにわが島は如月半ば桜吹雪舞ふ

ほのぼのと新糖の香を乗せながら活気あふれて徳之島は春

最終講義の朝 水 辺 あ お 静 岡

エクセルとワードになじみしわれが書く紙の面は凹凸あらず

咲きそめし梅の影踏み校門をくぐりぬ最終講義の朝

梅の香のただよふ朝春耕の人ひとり来てまたひとり来る

（和顔施）の言葉うつくし美しき言葉生まるる時間を思ふ

春の雨降つてゐるらし彼方より農免道路黒くぬれくる

言ひのがれ言ひのがれるす、嘘つきは安倍のはじまり「皆」たがはず